

史実を欺く『栄花物語』：巻五「浦々の別」における年次設定

二宮，愛理
九州大学大学院：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1932372>

出版情報：語文研究. 123, pp.1-14, 2017-06-04. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



史実を欺く『栄花物語』

— 卷五「浦々の別」における年次設定 —

一一 宮 愛 理

はじめに

『栄花物語』卷五「浦々の別」は、中関白家を取り巻く不穏な空気の中、話が始まる。左大臣藤原道隆の死後、内大臣として権勢を振るっていた長男伊周は、花山院に矢を向けたことなどの罪により、長徳二年、弟隆家とともに配流の旨旨を下される。左大臣の息子として将来を約束された立場であったはずだが、これにより、中関白家は没落の一途をたどり、代わって道隆の弟道長に栄花の道が開けることとなる。その後、京に残された定子は、帝の子を二人産んでいる。『栄花物語』では、長徳二年十二月には脩子内親王が、長徳四年には敦康親王が生まれたということになっている。その敦康親王

誕生の恩赦により、同年、伊周と隆家は帰京できることとなり、亡き母の墓前に参ったところで「浦々の別」の巻は終わる。この巻五は、伊周が須磨に下る光源氏に準えられ、親王誕生の恩赦は、源氏が春宮（後の冷泉帝）の後見として帰京を許されたことに準えられていると言われている。

『栄花物語』を「歴史物語」として素直に受容していると、一読これが史実かと思えてしまうのだが、この年次を『小右記』や『権記』、『日本紀略』といった他の史料に照らし合わせると、年次、できごとの順序に大きな齟齬のあることが分かる。『栄花物語』では、伊周兄弟は敦康親王誕生の恩赦によつて帰京できたことになっているが、史実では敦康親王が生まれるよりも前に帰ってきているのである。『栄花物語』は仮名の物語であり、その編年体叙述にはだいたい緩やかな部分

があるとはいえ、六国史の跡を継いでいるとまで言われている。そんな作品が、皇子の誕生という重大事について、年次を間違えて記すなどということがあるだろうか。本稿では、この敦康親王に関わる年次のずれに注目し、『栄花物語』に働いた意図を探ってゆく。

なお、『栄花物語』を始めとする本文の引用は特に断りのない場合、新編日本古典文学全集（以下、『新編全集』と略称）により、冊数と頁数を付記した。また、引用文中の傍線等は特に断りのない場合、引用者によるものである。

一、『源氏物語』の影、描かれない女院の病

敦康親王誕生の段の検討に入る前に、巻の冒頭で伊周が亡父の墓前に参じた場面に触れておかねばならない。配流の宣旨が下り、伊周は自邸から密かに脱出する。『栄花物語』では、父道隆の墓所である木幡へ参り、次に菅原道真が祀られている北野へ詣でたことになっている。しかし、『小右記』長徳二年五月二日では「愛太子山」^{〔注〕}、『日本紀略』長徳二年五月四日では「春日社」^{〔注〕}となっており、実際のところは不明である。この冒頭も含め、「見果てぬ夢・浦々の別」の伊周の配流事件と、「須磨・明石」の光源氏の配流事件は、早くは山中裕

氏^{〔注〕}により、その関係性が指摘されている。『栄花物語』本文中でも、帰邸した伊周の姿を「かの光源氏もかくやありけむ」（1・2四八頁）と評して、「源氏物語」を意識しているのは間違いないだろう。山中氏は、この『栄花物語』と『源氏物語』両者の関係に加えて、本稿の主題でもある敦康親王誕生を始めとしたこのあたりの年次についても詳しく述べている。

さてそこで栄花物語のこの事実を調べてみるに伊周・隆家の召還は皇子御誕生によるものではなく、東三条院の御悩によるものである事が日本紀略・小右記・百練抄等によって明らかである。（中略）召還の原因を皇子御誕生としたのは栄花物語のみである。これこそ源語を模倣したためであろう。そして皇子御誕生は長保元年の事実であって、伊周召還から二年後の事実である。（中略）このような編纂状態の混乱は栄花の著者が長徳三年の事件である伊周隆家召還の原因をその原因である東三条院の御悩とせず、わざわざ源語に模して皇子御誕生に結びつけたため、長保元年の事件を挿入するという無理な編纂状態を呈してしまったと考えられる。（*引用者注・旧字体は現行の字体に改めた）

山中氏によれば、混乱の元は本来の恩赦の事由である「東三条院の御惱」としなかつたためであり、さらには『源氏物語』で、源氏を春宮（世間的には伏せられているが源氏の子）の後見とするために召還したことに準えたからだという。『栄花物語』では源氏と伊周、春宮と敦康がそれぞれ対応するような人物設定になっているのだが、実際の年次のままでは敦康の誕生が遅すぎてうまく対応しないのである。この『栄花物語』と史実の関係を年表にまとめると図1のようになる。

また、松村博司氏^(注4)は、『源氏物語』を模したという山中氏の説に対し、次のように述べる。

この考えは、本巻の全体に『源氏物語』の影響が濃厚に、また顕著にうかがわれるところから見て、具象化された事実としては否定す

図1 『栄花物語』と史実の年次比較

	年次	栄花	史実
卷五	996	伊周・隆家に配流の宣旨	
	長徳2	四月二十四日 伊周・隆家配所に出立	四月二十四日 伊周・隆家に配流の宣旨(小、紀、補)
			六月八日 二条第焼亡(小、紀)
			十二月十六日 脩子内親王誕生(紀)
		十二月二十日ごろ 脩子内親王誕生	
	997	二条第焼亡	
	長徳3		三月二十五日 東三条院御惱大赦(紀、百)
		夏 高階成忠、定子に参内を進める	
			四月五日 伊周・隆家に召還の宣旨(百)
			四月二十二日 隆家入京(小)
			五月十三日 隆家入京(略)
		定子・脩子内親王参内	六月二十二日 定子・脩子内親王参内(小、紀)
		定子懐妊、退出	
		冬 承香殿元子懐妊	
			十二月 伊周入京(補)
	998		二月十一日 道兼女尊子入内
	長徳4	敦康親王誕生	
		四月 伊周・隆家に召還の宣旨	
		五月三・四日 隆家上京	
	五月五日 隆家妻と歌贈答		
	六月 元子太秦広隆寺で水を産む		
	高階成忠逝去	七月(二十五日?) 高階成忠逝去(紀)	
	十二月 伊周帰京		
	伊周・隆家、貴子の墓所に参る		
卷六	999	彰子裳着	二月九日 彰子裳着(御、紀、世)
	長徳5		六月十四日 内裏焼亡
			十月 入内準備(御、小、権)
	長保元	十一月一日 彰子入内	十一月一日 彰子入内(御、小、権、紀、略)
		十一月七日 敦康親王誕生	

(*作成にあたって、新編全集を参考にした。表中の略号は、御=御堂閔白記、小=小右記、権=権記、左=左経記、紀=日本紀略、略=扶桑略記、百=百練抄、補=公卿補任)

ることはできない。すなわち、この箇所は、作り物語に似せて書くことによる事実の改変と見られるのである。

配流の宣旨が下った夜以降の伊周の失踪先のように、事実や詳細が不明である事柄について潤色しているというのではない。「作り物語に似せて書く」という明らかな意図をもって書かれたというのである。諸研究は概ね、この「源氏物語に似せるために操作を行っている」という意見に賛同しているようである。河北騰氏は「意識的虚構または物語的創作」とし、津島知明氏は「長徳四年。『栄花』によるこの年次設定は、言われているように伊周・隆家らの召還を、敦康の誕生と結びつけるための作為であった」と述べている。

加えて、松村氏は、『栄花物語』が召還の理由を「東三条院の御悩」としなかつた点について、清水好子氏の論（注7）を引いて論じている。清水氏が指摘するのは、道長の日記である『御堂関白記』に空白期間があることと、その原因についてである。

すると、旧年長徳四年九月道長快癒後の日記の空白は彰子入内の実現に奔走していたからだと推定されそうだ。立後の準備期間、もっとも熱心な努力の期間がびつたり

と関白記における空白の時期にあたること、権記によって証せられたいま、長徳四年秋冬の不執筆を女御入内画策期とみるのである。

清水氏は、長徳四年の後半の日記が欠けている理由を、彰子の入内に奔走していたからであるとしている。それを踏まえて松村氏は、

本巻はこのような、道長の病氣、彰子入内の画策、東三条院御悩等一切触れることなく、その結果長徳四年の史実は大きく改変されたのである。このように見てくると、この年の史実の書き替えは、『源氏物語』に似せようとしただけで起ったというよりはむしろ、道長の病氣以下一連の史実を避けようとして、それらと無関係な記述をする必要上考え出されたこととも言えそうであるが、あまりに穿った見方であろうか。

と述べている。『栄花物語』が避けようとした「道長の病氣以下一連の史実」が「道長の病氣、彰子入内の画策、東三条院御悩等」だとすれば、その回避にはどのような意味があるのだろうか。

以上のように、当該場面についての先行研究では、『源氏物語』須磨・明石の巻に影響を受け、それを模倣しようとしていること、そして東三条院病惱など一部のできごとが描かれていないことが指摘されている。この二点に注目しながら、敦康親王の生年誤りについて考えていく。次節ではまず『源氏物語』との関係について考察する。

二、虚構対現実の構図

前節で見た通り、現時点での定説は、『源氏物語』に近づけるため、親王の生年を操作することによって伊周兄弟召還の恩赦事由としようとした」というものである。本節ではこの準えの関係について考察していくのだが、しかし、ここで一つ『源氏物語』と『栄花物語』には大きな違いがあることに注目しなければならない。津島氏は前掲の論の中で、『源氏物語』と『栄花物語』では、召還された人物が「後見」と見なされているか否かという点で差異があることを指摘している。

まずは『源氏物語』明石の巻で源氏の召還が決まる場面である。男子が生まれ、そろそろ讓位しても良かろうと朱雀帝が考えを巡らせている。

春宮にこそは譲りきこえたまはめ、朝廷の御後見をし、世をまつりごつべき人を思しめぐらすに、この源氏のかく沈みたまふこといとあたらしうあるまじきことなれば、つひに後の御諫めをも背きて、赦されたまふべき定め出来ぬ。(『源氏物語』明石 2・二六二頁)

源氏は帝の後見として世の政治を執るにふさわしい人であるということから、自らの母である弘徽殿太后に背いてでも呼び戻そうとする朱雀帝の判断が描かれる。このように『源氏物語』では、「おほやけ(冷泉帝)」の「御後見」として源氏が召還されたことがわかる。

一方、『栄花物語』伊周・隆家の召還の場面では、一条帝が女院(詮子)と上の御前(倫子)と相談し、さらに道長にも申し出ている様子が描かれる。

かかるほどに、今宮の御事のいといたはしければ、いとやむごとなく思さるるままに、「いかで今はこの御事の驗に旅人を」とのみ思しめして、つねに女院と上の御前と語らひきこえさせたまひて、殿にもかやうにまねびきこえさせたまへば、「げに御子の御驗ははべらむこそはよからめ。今は召しに遣はさせたまへかし」など奏したまへ

ば、上いみじううれしう思しめしながら、「さはさるべきやうにともかくも」とのどやかに仰せらる。(1…二八五
(六頁)

『栄花物語』では『源氏物語』とは異なり、「御子の御験」、すなわち皇子誕生という慶事による恩赦に留まっている。つまり、伊周兄弟は敦康親王の後見とはなり得ていないのである。二人のこのような扱いが以降も続いていることについて、津島氏^(注8)は以下のように述べる。

『栄花』がそれまで敦康の「後見」と呼んできたのは、もっぱら「御匣殿」(道隆四女)だった(巻第五・六・八に一例ずつ)。(中略)『栄花』はそれを、一条が敦康を語る場面に限って、立坊あるいはその後の政権を支える公的存在として、しかもそれが「いない」という形で特化させているわけだ。

『栄花物語』において、敦康親王の後見は御匣殿と呼ばれる叔母である。しかしその御匣殿も長保四年に死去し、敦康親王の即位はほぼ不可能になった。伊周兄弟は後見とは見なされないで、『栄花物語』では敦康親王の後見は「いない」ので

ある。また津島氏は同論文で、『栄花物語』について、次のようにも述べる。

『栄花』が伊周らの召還を『源氏』に拠るかに装いながら、「後見」なる語を避けていたこと、一条がその不在しか語らないことに、むしろ『栄花』の腐心をみるべきである。

そして『源氏物語』については次のように述べる。

逆にいえば『源氏物語』は、敦康の即位もが起り得るような世界を、「後見」を鍵語に実現してしまった物語だともいえる。しかも興味深いことに、その成立と同時に期に敦康を育む一条と彰子の姿があったわけだ。

津島氏が言うように、『栄花物語』は、『源氏物語』では達成された冷泉帝即位と対比することで、史実では達成されなかった敦康親王即位を、読者が意識できる形で描いていることになる。つまりこの「源氏準拠」は、一見準えと見せかけて、虚構(後見として源氏が帰京し、そのまま春宮が帝位についたこと)と、現実(伊周兄弟が戻ってきて後見とはなり得

ず、帝位争いから外されたこと」とを、対比しようとするものなのである。この『栄花物語』の対比構造は、『源氏物語』を知っている読者には、大いに「あはれ」を誘ったであろう。

それにしても、これを構築するために、『栄花物語』では極力「源氏物語」に似せる必要があったわけだが、しかしそのただけに親王の生年の操作という大それたことをするものだろうか。「皇子誕生の験による恩赦」であれば、内親王ではあるが長徳二年十二月十六日に脩子内親王が生まれている。もちろん『源氏物語』では男皇子であつたのだし、即位の可能性などの点で、親王と内親王では大きな違いがある。しかし脩子が誕生したことにより、少なくとも年次操作に及ばずに済ませることもできたはずなのである。それを思えば、これまで定説である『源氏物語』に近づけるため、親王の生年を操作することによって伊周兄弟召還の恩赦事由としようとした」という考え以外にも、何かしら理由があつたのではないかと思えるのである。そこで次節では、松村氏が注目していた「東三条院の御悩を書かなかつた点」について考えてみる。

三、消えた詮子病悩

前節で詳しく見た『源氏物語』と『栄花物語』の準えの關係に加えて、先行研究において指摘が多いのが、「長徳三々四年あたりの詮子と道長の病氣を書かない」ことである。その理由について、第一節で引いた松村氏の論に加えて、深澤三千男氏（注）は以下のように分析している。

この局面で、伊周を源氏に見立てた（『栄花物語』自体に明示）以上、伊周執政に執拗に反対して、わが子一条帝に、好意を寄せていた道長がまだ大臣にすらなっていないのに、あらゆる先例を無視して執政に指名するよう迫つた（『大鏡』に詳しく、『栄花物語』には仄めかし程度）東三条院こそ、源氏の敵役弘徽殿太后にイメージがだぶつて行くだろう。（中略）先行イメージとして厳然として、こわもてで底意地の悪かつた弘徽殿太后のイメージがあつたのだから、この際実実通り東三条院御悩と伊周等の赦免を直結してしまうと、弘徽殿のイメージと重なりすぎてしまうだろう。（中略）善意の人としてイメージ付けたい以上、詮子に悪役弘徽殿をだぶらせるわけには行

かなくて、いわば『源氏物語』避けて史実改変を迫られた動機が推測されよう。

『栄花物語』が『源氏物語』に寄せようとすればするほど、実在の人間関係に『源氏物語』の登場人物が重ね合わされることになる。その結果、東三条院詮子が、主人公源氏の敵として描かれている弘徽殿太后と、当帝の母という立場で完全に一致してしまうのである。確かに、それは避けたことであろう。その一方で、深澤氏は以下のようにも述べている。

この局面ではむしろ史実では『源氏物語』と一致していた、東三条院御悩による「大赦」（山中はこれをも『栄花物語』著者が知らなかった事とする）の史実を伊周等赦免の原因から外してしまう事で、暗い悪役を排除し、史実に反してまで『源氏物語』離れる場合もあった事が面白く思われるのである。つまり『栄花物語』著者は『源氏物語』にどっぷりと浸り放しだったのではなく、『源氏物語』を利用する事によって、『源氏物語』以上の世界をこの世に構築しようと企てたように思われるのである。勿論そうした方針が『源氏物語』世界の深い記号性、ドラマ性をすっかり台無しにした、平板で無味乾燥な『栄

花物語』を作り出してしまふ結果に終わったにせよ。

前節では、津島氏の論から、伊周と源氏、敦康親王と冷泉帝について『源氏物語』と『栄花物語』の差異を見たが、ここでは東三条院詮子と弘徽殿太后のイメージについて『源氏物語』と『栄花物語』の差異が指摘されている。また深澤氏は次のようにも述べる。

史実との齟齬があるからといって、必ずしも史書たるよりも物語たる事が目ざされていたと、短絡して考える事はできない。（中略）時日ひいては因果関係の変更にまで及ぶ、史料操作による理想化Ⅱ歴史の組替えも容認される面があったと察せられる。

この考えによるならば、『栄花物語』は『源氏物語』以上の理想化された世界を目指したものであるということになる。詮子から悪役弘徽殿のイメージを排除し、伊周召還の事由を変更することになった「詮子病悩を隠す」という操作は、その一端だといえるだろう。

しかしここで、この詮子と弘徽殿の関係についても、前節の考察と合わせて「虚構対現実」の対比構造を当てはめてみ

することはできないだろうか。『源氏物語』という「虚構」では、意地悪な敵役の弘徽殿がいながらも、源氏は政界中枢への復帰を果たし、冷泉帝も無事即位する。一方「現実」の立場に置かれるはずの『栄花物語』ではどうだろうか。伊周は帰京こそできたものの元の位には程遠く、敦康はついに春宮とはなりえなかった。伊周らの不在の折、参内をためらう定子に若宮との参内を勧め、敦康の誕生に際しても様々な贈り物をして、伊周兄弟の召還に際しても異を唱えることはしない。そんな女院がいたとしても、この「現実」は変わらないのである。

とはいえ、この「中関白家に優しい詮子像」を「史実」と言い切るのは難しい。しかし、「脚色された現実」であったとしても、歴史の大きな流れは壊さず、それでいて「虚構」である『源氏物語』の弘徽殿太后と対比させるには十分効果的である。この対比が深澤氏の言う『源氏物語』以上の世界をこの世に構築しようと企てた「ことに当てはまるのかどうかは判断しかねるが、『源氏物語』との対比構造によって読者に「あはれ」を感じさせるというところに、『栄花物語』の意図があるのではないだろうか。

さらに、弘徽殿との関係性に加えて、もう一つ注目してお

きたい点がある。『栄花物語』が語る伊周の罪の中に、「帝の御母后を呪はせたてまつりたる罪」があることである。巻四「みはてぬゆめ」で、伊周が行った悪事が様々に語られるが、呪詛の疑いはその中の一つである。以下、この疑惑に関する『栄花物語』中の記述を確認する。

また、女院の御悩み、をりをりいかなることにかと思しめし、御物の怪などいふ事どももあれば、この内大臣殿を、なほ御心掟心幼くてはいかがはあべからんと、傾き、もて悩みきこゆる人々多かるべし。(1:232頁)

女院(詮子)が病に罹り、人々は噂する。あの内大臣、やはり心の持ちようがこうも幼稚では…と、伊周が「何か」してかすのではないかと噂されているさまが描かれる。この段階では、この件は噂以上のことは語られず、「祭果ててなん花山院の御事など出でくべし」(1:231頁)と、話題の中心は花山院への不敬事件に移っている。しかし、次の巻五「浦々の別」では、次のように罪状が述べられる。

聞けば、「太上天皇を殺したてまつらむとしたる罪一つ、帝の御母后を呪はせたてまつりたる罪一つ、公よりほか

の人いまだおこなはざる大元法を、私に隠しておこなはせたまへる罪により、内大臣を筑紫の帥になして流し遣はす」といふことを読みのしるに、宮の内の上下、声をとよみ泣きたるほどの有様、この文読む人もあわてたり。(一・二四二頁)

傍線部の通り、罪状の中には「帝の御母后」を呪詛したことが含まれている。伊周配流の事由は、諸記録によって若干の差が見られるが、『日本紀略』と『小右記』^(注1)にはこの女院への呪詛が明記されている。真相は不明だが、伊周が詮子を呪詛しているとの噂は世間に広まっていたと言つて良いだろう。

このように、諸記録を追つていくと、伊周が詮子を呪つたこと、それらの罪で左遷されたこと、その後詮子が実際に病気になることという、伊周と詮子に関する事柄の流れが浮き上がってくるのである。『栄花物語』が詮子の病気を表に出さなかつた理由はここにあるのではないだろうか。つまり、詮子の病気をありのまま書くと、あたかも伊周の呪いが効いているかのように見えてしまう。『栄花物語』はそれを避けたかったのである。

実際に、『権記』の中には、詮子が物の怪に悩まされていることが記されている。長保二年五月二十二日の記事に、先年、

つまり長保元年(長徳五年)、詮子が「高二位」の靈に悩まされたとある。

二十二日戊戌(中略)

参院、参内、

今朝定澄律師來臨。相逢、召仰勸解由判官行忠、自院請興福寺僧十五口、始自來廿六日、於長者殿、為消除御惱、可令軼読大般若不断經、「諷經」、先年院御惱之時、靜昭闍梨申行此事、高二位靈出來云、功德殊勝之由、其度御惱早平癒。仍今申行耳。

(増補史料大成『権記 一』臨川書店／一九六五)

ここでは道長のための読経の打ち合わせであったが、先年詮子の御悩でも同じ誦経を行ったところ、高二位の靈が現れ、「功德が殊勝である」と言つたというのである。高二位とは高階成忠のことであり、伊周らの母高階貴子の父である。このように、伊周の親族の物の怪による騒ぎが実際に起きていたことが分かる。

『源氏物語』を知っている者は、朱雀帝の眼病が父桐壺院の靈によるものであると知っている。『栄花物語』が、もし史実の通りに詮子の病気を描いていたとして、『源氏物語』と同様

に、詮子の「御悩」が霊のしわざだとすれば、その霊は誰か。

史実でも物の怪騒動は実際に起きていた。そしてその霊の孫に当たる人物が「女院呪詛」の容疑を持たれている。読者が『源氏物語』と史実の両方を知っていれば、伊周は疑わしい人物として真つ先に思い浮かぶことであろう。その場合、まだ呪いが詮子に効いている状態で呪詛した本人である伊周を赦免してしまつては、物語として不都合であろうし、今後物語中で「栄花」を描かなくてはならない道長の失政とも映ろう。加えて、前述した「虚構対現実」の対比構造を最大限に活かすためには、伊周は源氏に極力似せなければならぬ。ここで本当に伊周が呪詛しているように見えてしまうと、伊周は「無実の光源氏」の立場を失ってしまうのである。この不都合を消し去るには、伊周のしわざではないように細々と手を加えるよりも、いっそ詮子の病悩そのものをなかつたことにするのが一番効果的だったのである。

しかし、なぜ恩赦を長徳四年にしたのかという疑問が残る。詮子の病悩について書けないとして、敦康親王誕生の恩赦とするならば、親王誕生の年次である長保元年に恩赦を寄せるように操作する選択肢もあつたはずである。そうしなかつたのはなぜか。次節ではその点について検討する。

四、彰子入内のタイミングと道長の暗躍

ここまで、『栄花物語』が敦康親王を利用することで『源氏物語』に準えられたこと、また、詮子の病気を描かないことの意味について考察してきた。本節では、なぜ伊周兄弟の帰京が史実と一年ずれているのかについて考察する。

深澤氏は「須磨退去の翌々年召還された源氏の年立に就つた」と述べるが、さしあたって注目したいのは、第一節で引用した清水氏の論と、それを踏まえた松村氏の論である。繰り返しになるが、清水氏は、長徳四年七月から十二月までの半年間、『御堂関白記』の記述がない理由について、翌長保元年二月、入内前の彰子が従三位になるという点に注目して、空白の長徳四年下半期を、道長の「女御入内画策期」と見ている。これを踏まえて松村氏は、長徳四年の史実の書き替えは「道長の病氣以下一連の史実を避けようとして、それらと無関係な記述をする必要上考え出されたこととも言えそうである」と述べている。

深澤氏の説を積極的に否定する理由はないが、松村氏の言う「長徳四年の道長」を隠すために史実の書き替えまで行つたという説も少し考えてみたい。確かに政争のため暗躍する

姿は好ましいものではないかも知れないが、それも詮子の病
悩と同じく、そもそも書かず長徳四年の記述を短く済ませ
ば良いだけのことである。本当に目的は隠すことだけなのだ
ろうか。

ここで『栄花物語』巻五「浦々の別」から少し進み、巻六
「かかやく藤壺」に目を向けてみる。巻六は彰子の裳着、入内
への言及から始まる。

大殿の姫君十二にならせたまへば、年の内に御裳着あり
て、やがて内に参らせたまはむといそがせたまふ。(1..
二九九頁)

ここには年次や裳着の様子そのものについては記されない。
その代わりのように入内の準備の様子が語られ、道長、花山
院、公任などから祝いの歌があったことを述べ、早々に入内
の場面に移る。長保元年十一月一日のことである。諸記録と
も齟齬は全くない。『御堂関白記』によると裳着が長保元年二
月九日のことであるから、裳着と入内の間には史実では約九
か月もの隔たりがあるのだが、裳着から入内まで実に手際良
く流れて行く。この巻六冒頭の新編全集の頭注には、

巻頭に成人した彰子を置き、時代の新しい局面を描く。
道長の子女という新たな世代の登場が歴史の切れ目とし
て機能し、『栄花』の巻単位の構想を成り立たせている。

(1..二九九頁)

とある。巻が替わると同時に、新たなヒロインともいうべき
彰子が登場し、その華々しい後宮デビューが語られていくわ
けである。

さて、ここで史実に目を向けると、彰子の入内の六日後、
長保元年十一月七日に何があったか。一条天皇第一皇子、敦
康親王の誕生である。道長にとって、娘の華々しいデビユー
に水を差す、さぞ邪魔な存在であっただろう。この後、『栄花
物語』巻六では、彰子と定子の様子が交互に描かれ、次第に
二人の明暗が分かれて行くという流れなのだが、もしここで
敦康親王が生まれていたならば、入内早々にライバルである
定子に大きく後れを取ってしまったような印象を持たせかね
なかつたであろう。

また同様の例として、『栄花物語』では長徳五(長保元)年
六月の内裏焼亡が無視されていることが挙げられる。こちら
も新編全集頭注に指摘がある。『栄花物語』では当初から「こ
の御方藤壺におはしますに」(1..三〇二頁)と、通常通り宮

中に入ったような書きぶりであるが、この火災により実は入内当初は里内裏で、約一年後、改めて藤壺に入ったという。大きく史実から外れる嘘をついているわけではないが、「かかやく藤壺」と、こちらも『源氏物語』を意識した巻名に瑕をつけないよう、意図的に隠された出来事かもしれない。

『栄花物語』としては、彰子の入内という慶事に水を差す「敦康親王の誕生」という出来事を、そのままにしておくわけにはいかない。とはいえ第一皇子の存在自体を抹消するわけにもいかない。姉である脩子内親王の誕生や、定子本人が参内した期間との兼ね合いもある。ではどこに移動させるか。そこで考え出された年次が「長徳四年」だったのではないだろうか。こうすることによって、巻五「浦々の別」は中関白家の動静のみに集中する巻となる。長徳二年、伊周兄弟の転落劇があり、翌年、長徳三年は独り心細く過ごす定子に目向けられる。そして、恩赦がちょうど一年遅くなっていることにより、長徳四年十二月に伊周が帰京したところで巻五が終わる。それと同時に「栄花」の主役も交代することになるのである。さらに深澤氏の説も加えると、伊周と源氏を繋ぐ糸を補強することにもなり、まさに八方丸く収まる采配だったのだろう。

おわりに

歴史の順序を大きく捻じ曲げた『栄花物語』における長徳四年の記事の不審は、これまでは『源氏物語』に準えるための操作であるという指摘に留まっていた。本稿では、まず第二節で、その「源氏準拠」の意味が、実現しなかった敦康親王即位をめぐる虚構と現実の対比にあったことを再確認した。第三節では、本来恩赦の事由であったはずの詮子病悩を『栄花物語』が隠蔽した理由について考察した。詮子と弘徽殿太后を、立場的には重なりつつも人格的には異なった似て非なる人物として描くことにより、第二節の対比構造がより深まることを指摘した。また、伊周の女院呪詛の結果と読者に受け取られかねない状況があったこと、それが物語の展開に不都合を引き起こすことなどを指摘した。そして、第四節では、恩赦の年次が「長徳四年」に設定された意図について、物語の内容と巻の変わり目を整合させることで、読者に時代の変化をも意識させる手法なのではないかと考察した。

『栄花物語』巻五「浦々の別」は、『源氏物語』と対比させながら、歴史の敗者となった中関白家の人々の「あはれ」を描いた。しかし、中関白家の話は巻五で片付けられ、巻六か

らの女御彰子という新たなヒロインの時代の到来の邪魔はしない。「源氏準拠」という一つの演出のために行われたと思われた『栄花物語』の年次の操作は、実はそれ以外の様々な史実との相違という不都合への対処や、作品構成上の思惑も絡み合って、大胆になされたものであった。

注

- 注1 「道順朝臣相共向愛太子山」増補史料大成『小右記 一』臨川書店／一九六五
- 注2 「権帥自春日社帰京」新訂増補國史大系第十一卷『日本紀略後篇 百練抄』吉川弘文館／一九二九
- 注3 山中裕「栄花物語における源氏物語の影響」『歴史物語成立序説』東京大学出版会／一九六二 *初稿「国語と国文学」三〇一七／一九五三
- 注4 松村博司「栄花物語全注釈二」角川書店／一九七一
- 注5 河北騰「浦々の別」の巻について『栄花物語研究』桜楓社／一九六八 *初稿「浦々の別れの巻について」『言語と文芸』七一二／一九六五
- 注6 津島知明「敦慶親王」の文学史『日本文学』五七一五／二〇〇八
- 注7 清水好子「藤原道長」『中古文学』創刊号／一九六七
- 注8 同注6。
- 注9 深澤三千男「源氏物語と栄花物語(三)」『王朝歴史物語の世界』吉川弘文館／一九九一
- 注10 「依奉射危華山院法皇。又奉咒詛東三条院」新訂増補國史大系

- 第十一卷『日本紀略後篇 百練抄』吉川弘文館／一九二九
- 注11 「射花山法皇事、呪阻女院事、私行大元法師事等也」増補史料大成『小右記 一』臨川書店／一九六五
- 注12 同注9。
- 注13 新編日本古典文学全集『栄花物語1』小学館／一九九五

(にのみや あいり・本学大学院博士後期課程)